

祖父の死
小嶋祥三

いつのことだったか、老夫婦が出演するコントのような動画を多分テレビで観た。老夫婦はお互いに、「とくに長生きしようとは思わない、いつ死んでもいい」といった意味のことを話していた。ところが、やおら時計に目をやると、「オットいけない、スポーツ・クラブに行く時間だ」と夫婦そろって出かけるところで、コントは終わった。

コントの作者は、老夫婦の言葉と行いの矛盾を面白いと思ったのだろう。しかし、そろそろ、と思っているわたしは笑えなかった。わたしも、老夫婦と同じように、とくに生に執着しようとは思わない。どういう形にせよ、その時がきたら死を受け入れざるを得ないと思っている。しかし、わたしはラジオ体操や、縄跳び、ボール投げをして身体を気遣っている。この二つは矛盾していない。いつ死んでもいいのだが、その時までには元気でいたいのだ。周囲に迷惑をかけず、身のまわりの世話は自分でやっていきたいのだ。ピンピンコロリ PPK に近い考えだろうか。

以上、書いたことに嘘偽りはないのだが、しかし、死を考えるとボーゼンとしてしまう。永眠という言葉が示すように、死はもう目覚めることのない眠りと考えると、少し心が休まる。それなら、毎日経験していることと、あまり違わない。これまで、祖父、父母、妻の父母の身近な死を経験してきた。父母、妻の父母が亡くなったのはわたしが 50 歳前後だったので、かれらの死に対する心の準備はできていた（それでも、亡くなった母が夢に出てきた時は飛び起きたが）。1964 年、日本中が東京オリンピックで沸き立っている時、大学生だったわたしは死について考え、苦しい日々を送っていた。それには母方の祖父・古川義天の死が関係していたかもしれない。

祖父はわたしが中学 2 年の夏（昭和 32 年 8 月）に亡くなった。祖父のことはこのホームページにほとんど書いていないので、思い出してみる。祖父は確か明治 8 年（多分）に淡路島に生まれた。島の先山千光寺（真言宗）で修業をしたらしい（1997 年に祖父の故郷を訪ねてみた）。旧制四高（金沢）を経て、東京帝大で印度哲学を学んだようだ。祖父は大学卒業後に東北地方で教育関係の職についたらしい（祖父は戦前の「高等官」だった）。旧制安積中学（福島）の校長をしたり、東北帝大医学部の前身の医学専門部の生徒監兼修身教授をしたり、最後は東北帝大医学部学生監を務めたようだ（大正 7 年 4 月）。ただし、1 年あまりで宮内省に転出し、竹田宮家（戦後、オリンピックで有名になった）に仕えていた。なお、成田山仏教図書館に祖父の著作が収蔵されているようだ。

さて、祖父の死であるが、その瞬間は覚えているが、その前後、葬儀や納骨についてはほとんど記憶にない。抑圧してしまったのだろうか。中学生のわたしにとって、それはとても強烈な出来事だった。祖父の家もわたしたちの家も戦争で焼失してしまい、戦後、祖父はわたしたち家族と同居していた。祖父は脳溢血で倒れて以来身体が不自由になったが、

再発したのだろうか、暑いさなかに亡くなった。当時、あの世へ旅立つ者を家族全員で見送るという習慣があったのだろうか。家族全員が祖父の死の床の周りに集まった。祖父は荒い息をしていたように思う（はっきりした記憶はない）。わたしはいたたまれなくなり、その場から逃れようとした。しかし、母はわたしの腕を強くつかみ、席に引き戻した。わたしは家族とともに死にゆく祖父を見守った。そして最後の瞬間が来た。祖父は人生最後の空気を吸い込むと、それをゆっくりと吐き出し、静かになった。

このことは時折思い出され、わたしは死について考えるようになったのかもしれない。このホームページに書いた『デ・キリコ、ハンマースホイ、ホッパー：絵画の思い出』の「別の世界」への興味もこの経験によるのかもしれない。しかし、わたしは職をえて、結婚をして家庭を持ち、子どもをもうけ、世の中で暮らしていくのに忙しくなった。この記憶は心の底に沈んでいったように思う。時折、それは意識の表面に浮かんできたが。しかし、わたしは職場を定年退職し、今年で73歳になる。死について再び考えざるを得ない年齢になった。肺がんもやったし、この後何年生きられるか分らない。そろそろ、いよいよ、といった心境だ。